様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４５５

研究課題名（和文）長い18世紀の女性表象における感覚と嗜好の変容と感受性との関係性に関する研究

研究課題名（英文）Study on Transforming Female Sense and Taste in the Long-Eighteenth-Century Dramas and Their Relationships to Sensibility

研究代表者
梶　理和子（Kaji, Riwako）

山形県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：６０２９９７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年の感受性の形成に関する研究を、長い18世紀の女性表象にまつわるセンスとテイストの変容という観点から再考した。17世紀から18世紀にかけて、舞台上に表象される女性にまつわるセンスは肉体的感覚から判断力へと、テイストは味覚、性的快楽（の経験）から審美眼へと、その意味を拡大・変化させた。そこで、王政復古期のエロティックな女性の身体と18世紀後半の女性の感受性を接続することで、性的・非性的肉体と精神・感性との関係性の一端を明らかにし、国際政治やグローバル化の進む消費文化、市民社会の誕生等と感受性形成との関連の重要性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義は、(1) 感受性の形成にかかわる肉体と精神の問題について、多様な女性表象の再考に基づく身体性の再定義、(2) センスとテイストの意味の生成・変化の分析による、身体性と精神性との関係性の見直し、(3) 公共圏／親密圏／私的空間における女性の役割を再配分することによる、感受性がその場で果たした役割の再確認、の3点である。このように長い18世紀における女性の肉体と精神という観点から、感受性の形成過程を検証することで、ジェンダー研究、市民社会・国家（形成）の問題とも密接に結びつくと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study reconsidered the recent studies of sensibilities by examining how the representation of female sense and taste were transformed in the long-eighteenth-century dramas. Meanings or indications of sense and taste were diversified onstage and their semantic contents shifted; Sense signified not only bodily senses but mental capacity or good judgment, and taste deemed primarily from gustatory sense or enjoyment of sexual pleasure to discernment or appreciation of beauty. Through connecting sensual female bodies displayed on the Restoration stage to female sensibilities presented in the later-eighteenth-century dramatic works, the relationships between [un]eroticized body and [un]sensual mind were illustrated, as well as their relations to sensibility not attributed only to sexual desire. Meanwhile, importance of associations was clarified between formulation of sensibility and international politics, the advent of globalized consumption culture or civil society.

研究分野：英米文学

キーワード：感受性　センス　テイスト　身体性　精神性　消費文化　モラル　ジェンダー

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）研究動向の背景

18 世紀後半の「感受性の時代」の形成に関する研究において、思考、精神、モラル等、形而上的に理解されがちな感受性が、そもそもは肉体と密接な関係を持つものであったことが確認され［Janet Todd, *Sensibility: An Introduction* (1986)］、とりわけ、生理学、医学等の肉体にまつわる学問の発達が、感受性の形成過程において重要な役割を果たしていたことが明らかにされてきた［G. J. Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility* (1992)］。そして、近年、肉体と精神にまつわる感受性の発展の歴史を、17 世紀後半にまで遡って考察する研究［Laura Linker, *Dangerous Women* (2011)］が開始されているものの、感情、情動、身体、感覚といった観点からの感受性研究の高まりは、その対象のほとんどが 18 世紀以降の文化やテクストである。このような研究動向を踏まえて、本研究課題は、現代につながる感受性形成の始点として、あるいは大きな転換点として、17 世紀後半に始まる問題に注目する必要性に至ったものである。

（2）本研究者の研究の背景

本研究者は、1990 年代以降の 17 世紀の女性作家の誕生とその文化的状況の研究に基づき、Aphra Behn の上演・出版戦略をジェンダー的観点から検証してきた。本研究課題は、第一に、このような女性作家研究を長い 18 世紀という枠組で発展させるものである。そして、18 世紀の公共圏における女性の役割に注目して、まず、18 世紀初頭の女性作家の政治文化的状況を明らかにし、次に、女性作家の過激な性的言説と公共圏との関係について、私的空間と親密圏の問題も射程に収めた研究を進めた。本研究課題は、第二に、このような公私空間における女性作家および女性表象に関する研究を発展させるものである。そのうえで異端とされる存在（女性リバタイン）をも内包する親密圏を中心課題にすえ、その形成・変容過程から公私空間への影響を検証した。本研究課題は、第三に、このリバタイン研究を感受性研究との関わりでとらえる必要性を認識した上での発展的課題である。以上のように、本研究は、これまでの（1）長い 18 世紀における女性作家研究、(2) 公共圏における女性表象の研究、(3) リバタイン研究を、感受性の研究と結びつけるために着想したものである。

２．研究の目的

本研究は、近年の感受性（sensibility）の形成に関する研究を、長い 18 世紀の女性表象にまつわるセンス（sense）とテイスト（taste）の変容という観点から再考するものである。この時期、センスは肉体的感覚から判断力へ、テイストは味覚、性的快楽（の経験）から審美眼へと、その意味を拡大・変化させる。王政復古期のエロティックな女性の身体と 18 世紀後半の女性の感受性を接続することで、性的・非性的肉体と精神・感性との関係性を明らかにするとともに、グローバル化を背景とした消費文化の発展における感受性の形成過程、および女性作家研究に新たな視座を提示することが本研究の目的である。

長い 18 世紀における感受性の形成という観点から、精神と肉体に関する女性表象の研究を進めるために、原子論の流行とリバティニズムとエロティシズムを重視することに加え、肉体の非性的な側面と精神性の変容にも注目する。とりわけ、センスという言葉の多様化・変容（エロティシズム、非性的肉体・非肉体的感覚等）、また、ここから派生するテイストの多様化・変容（エロティシズムと関わる身体性から、美意識、嗜好、審美眼といった感性・精神性）を考察する。具体的には、Aphra Behn、Delarivier Manley、Eliza Haywood 等の女性作家群とその演劇作品、そして Duchess of Portsmouth や Duchess of Mazarin 等のフランス出身の国王の愛人たちのサロンや、彼女たちに対する諷刺（詩や演劇）等を対象に、消費文化とそれに伴い形成・産出されるセンスとテイストの問題を検証することで、感受性の形成過程を再考する。このように、センスとテイストのもつ多様性から女性表象を分析し、感受性の系譜を再考することで、17 世紀から 18 世紀に繋がる女性作家研究に新たな解釈を加えることが、本研究の目的である。

３．研究の方法

長い 18 世紀の女性表象に注目し、センスとテイストの変容、リバティニズムとの関係という観点から、感受性の形成を分析するために、 (1) リバティニズムと感受性、および (2) センスとテイストに関する 1 次資料の収集・整理と、2 次資料に基づく分析基盤の整序、(3) センスとテイストの意味変化と感受性に関する１次資料の追加収集・整理、また 2 次資料に基づく視点の見直しや追加をおこない、(4) 報告、意見交換に基づき総括し、研究の方向性の確認、修正をおこなった。具体的には以下のとおりである。

(1) まず、リバティニズムに関する言説を、17 世紀後半の原子論の影響と英国での様々な受容という観点から検討するために、（女性の）性的な言説に対する批判、あるいは共感に関わる資料を収集、整理した。また、感受性の形成過程の研究に関わる医学、生理学に関する

学門分野の発展に目配りしつつ、長い 18 世紀における文学以外の資料の収集・検討をおこなった。その一方で、従来の公共圏（および私的空間、親密圏）に関する研究や、消費文化と英国のグローバル化に関する資料の収集・整理をおこない、リバティニズムと感受性の研究の基盤整理をはかった。

(2) 次に、センスとテイストを鍵語に、すでに所有している資料を再検討したうえで、センス、テイストの意味変化に重要な役割を果たした、当時の流行に関するテクスト（賭け事、ファッション、コレクション）、実在のテクストを生み出した女性、テクストの対象となった女性に関する言説（政治パンフレット、諷刺詩）を収集し、これらのテクストとセンス、テイストとの関係性を辿りやすい形に分類、整理した。そこで、長い 18 世紀の消費文化、グローバル化について、またジェンダー論を踏まえた公共圏、親密圏、私的空間についての理論課題および歴史的な意義を確認した。

(3) その上で、感受性とリバティニズムの関係性について、1) 感受性の肉体・精神の二面性とリバティニズムの性的・非性的言説の関係分析、2) 感受性とリバティニズムの同時代文脈における文化的布置の再検討をおこなった。その一方で、センスとテイストと感受性、リバティニズムとの関係性について、3）センスとテイストの文学テクスト上の表象分析と感受性、リバティニズムとの関係分析、4) センスとテイストの実在の女性表象の分析と感受性、リバティニズムとの関係分析をおこなった。

(4) このような作業過程で、研究会で報告をおこない、外部の研究者から感受性の形成に関わる宗教的、政治的、経済的な（国際）状況等、長い 18 世紀の時代背景について専門知識の提供を受け、検討課題を確認、修正しつつ研究を進めた。それまでの成果を踏まえ、学会での発表および外部識者との意見交換に基づき、感受性の形成・変容を、リバティニズムとの関係から、センスとテイストの変容という観点から総括すると同時に、近代的市民社会や資本主義の形成との関連性の重要性を確認した。

４．研究成果

17 世紀後半から 18 世紀にかけて、グローバル化を背景とした消費文化が発展する過程において、海外貿易や植民地経営に乗り出す人々、（上流階級に限定されない）女性消費者といった新興の人々の存在感が高まるなか、それまで支配的であった制度や価値観は揺れ動き、（新たな）感性や感受性が形成され、また変容していった。それは、イングランドが、オランダに取って代わるヘゲモニー国家へと向かう初期段階でもあり、宗教（プロテスタントとカトリック）、政治（国王と議会）、経済（土地と資金）的不協和がもたらす社会の変動の時期でもあった。そのような状況において、女性（表象）にまつわるセンスやテイスト、感受性が変容し、多様化していく過程、すなわち現代に通じる身体と精神に関わる感受性形成の一段階を、歴史資料や文学テクスト等の分析を通して明らかにした。具体的には以下のとおりである。

(1) チャールズ 2 世の帰還とともに再開された王政復古期の劇場において、女優の登場によってエロティックな女性の身体性が前面に押し出されていたのに対して、18 世紀の演劇作品においては、女性の貞節やモラルといった内面性に重点が変わる。このような変化は、当時のたいへんな贅沢品である中国製陶器に投影されるメタファーの変化、つまり男性の性的能力の高さや女性の過剰な性的欲望（William Wycherley）から、女性の性的モラルの脆さ、（誠実な愛の）真贋の問題（Susanna Centlivre, Elizabeth Griffith）へという変化に表れていた。しかしながら、女性に対する感覚的・美的・知的認識について、一見すると、モラルや美徳といった内面性に焦点が移るように見えながらも、依然として、男性の性的欲望の対象としての女性の身体性が問題となっており、むしろ女性の外面性（身体の表層）の重要性が高まっていくことを明らかにした。

(2) 女性の身体とそれを覆う外面に対する関心は、その内面性の判定と関わる問題であることが 18 世紀以降より顕著になっていく。大量消費社会が進むにつれて、高価な輸入品の高品質／低品質のコピー商品が登場し、前者はオリジナル商品の価値を高めるのに対し、後者はオリジナル商品のイメージを貶める。同様に、優れた判断力や知識をもち、洗練された着こなし、貴婦人の振る舞い方を習得することによって、「新しい貴婦人」が登場することもあれば、知性も感性も伴わない「偽淑女」が量産されてしまうこともある。このような時代、センス／テイストが、真贋・品質の高低を見分ける重要な概念として発展する。ヒュームが海外の贅沢品に対する欲望やその高い産業技術の模倣を、センスやテイストの洗練化の過程において肯定的に評価するように、人々が「化ける」ことで新しい力を手に入れ、新しい消費文化を作り出していくことは、すでに Aphra Behn や Centlivre の作品の中に描かれていることを確認した。

(3) **女性の身体とそれを覆う外面が、模倣・模造という行為によって意識的に構築・捏造することが可能となることで、従来の階級的区分や、センスやテイストの概念や価値観は大きく揺らぎ始め、女性のセクシュアリティやモラルに対する男性社会の不安が高まる。このような状況を** Centlivre **や** William Congreve **の作品の中に確認した。これらの作品では、新たな価値を生み出す女性たちの親密空間の可能性が描かれてはいるが、最終的には、洗練された女性的文化が醸成される可能性や、階級横断的な交流によって新たなセンスやテイストが構築される可能性は否定される。従来の社会制度や価値観が揺れ動かされることで生まれる可能性が示唆されつつも、その可能性が女性の過剰な欲望や節度を超えた振る舞いによって失わされることで、男性社会の不安が解消されることを明らかにした。**

以上のように、王政復古期のエロティックな女性の身体と 18 **世紀の女性の感受性を接続し、性的・非性的な身体性、精神性、感性等の関係性を確認する一方で、その背景としてグローバル化する消費文化の発展とモラルの問題、感受性の形成との関連等を考察した。このような考察を踏まえ、更に** Aphra Behn **と文学作品のジャンルとの問題を、**Behn **の女性の感情や感受性の（表現の）重視といった観点から検証することで女性作家研究を再考している。このような研究により、とりわけ作家晩年の散文作品に焦点を当てる必要性と同時に、王妃キャサリン・オブ・ブラガンザのイングランド変動期における重要性を認識することとなった。王妃の身体と精神は、イングランドの宗教的、政治的、社会的な変動と多様化に大きな役割を果たしていたと考えられる。このような観点から、今後の展望として、王政復古期、なかでも** 1688 **年前後の時期を、センスやテイスト、感受性の形成・変容の大きな転換期として検証し、再考する予定である。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

梶 理和子, 問われるセンスとテイスト —風習喜劇にうかがえる模倣の可能性と危険性, 東北ロマン主義研究, 査読有, 4 号, 2017, pp.33-47.

〔学会発表〕（計 3 件）

⑴ 梶 理和子, 変わりゆくセンス･テイスト･センシビリティ — 転換点としての王政復古期イングランド. **日本英文学会東北支部第** 73 **回大会** SYMPOSIA「**モダニティの問題としての**“dissociation of sensibility”**を再考する**」, 2018.

⑵ 梶 理和子, **言葉と身体 / 想像と視覚. 日本英文学会 東北支部 第** 71 **回大会** SYMPOSIA 「**英文学とヴィジュアル・カルチャー —表象の多様性をめぐって**」, 2016.

⑶ 梶 理和子, Sense **と／あるいは** Taste **—女性の消費願望とモラルの問題. 東北ロマン主義文学・文化研究会シンポジュウム「長い** 18 **世紀における** Sense(s)**の系譜**」, 2016.

〔図書〕（計 1 件）

十七世紀英文学会, 金星堂, 17 世紀の革命／革命の 17 世紀 —十七世紀英文学研究 XVIII—, 2017, 334 ページ. 梶 理和子, 不安で震える社会／笑いで揺れる劇場 —劇作家の「誠実なペン」が描くスペクタクル—. pp. 263-284.

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。